



童 話

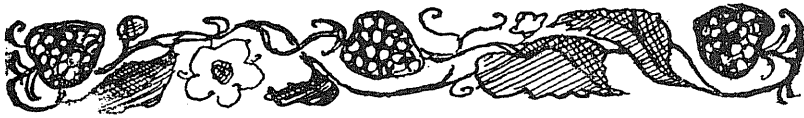
黄金の花

水谷 年惠子

一本の草が、ずん／＼伸びて、葉っぱを何枚も着けました。葉っぱは一本の草の下の方から上の方まで、互ひ違ひに出て、皆で十枚の餘もありました。

何處から來たのか、毛虫が一匹草の根本へやつて來ました。毛虫は赤茶けた毛を體中に生やしてゐました。毛虫は草の一番下の葉っぱを食べ初めました。柔い葉っぱは、すぐに食べられてしまひました。

毛虫は少し上の方へ登つて、下から二番目の葉っぱを食べ初めました。草のてつべんに出來た蕾が段々ふくらみました。毛虫は二番目の葉っぱを食べてしまふと、三番目の葉っぱを食べ、三番目の葉っぱを食べてしまふと、四番目の葉っぱを食べて、段々上の方へ登つて來ました。てつべんの蕾が半分咲いて、黄金色の可愛いらしい花瓣のかたまりが、外を覗きました。



毛虫はもう十枚目の葉つばを食べてしまつて、黄金色の花のすぐ近くまで登つて來ました。青空がからりと晴れて、太陽の光が、さんくくと草を照しました。黄金色の花瓣は、すっかり開いて、太陽の光を浴びて、美しく輝きました。

毛虫が食べ残しの小さな葉つばを食べようとすると、空の彼方から、ちちつと飛んで來た鳥が、ちよいと毛虫をついばんで行つてしまひました。

黄金色の花は二花、三花と段々咲いて、どの花も、どの花も美しく輝きました。

入道雲とボン太郎

眞夏の陽が、かんく照りつけてゐる時でした。蜻蛉釣に行つたボン太郎は、ヤンマを追駈けて、小山のてつぺんまで駈上つてしまひました。

「あつ、ヤンマが、入道雲の中へ這入つちやつた。」

ボン太郎は青天井へによつきりと廣がつて、下界をにらまへてゐる大入道を見詰めて居りました。すると、眞白い大入道が、パチツとまたゝきをしました、ボン太郎はびつくりして、「わあーつ。」